

第5章 熊本薬学専門学校

第1節 はじめに



写真1 熊薬建学記念碑(現在)

官及び学生数、科目等について記述するとともに、歴代校長の略歴、別けても熊本大学薬学部前身校の発展に一生を捧げた安香堯行校長の人柄が偲ばれるエピソードも含めて詳述する。

まず本章では、熊本薬学専門学校の前身校である復陽洞、再春館、蕃滋園、古城治療所について簡単に紹介し、続いて私立熊本薬学校、私立九州薬学専門学校、最後に熊本薬学専門学校について記述する。

第2節 復陽洞

肥後熊本藩第7代藩主細川宗孝の時代の元文年間(1732~47)に医師村井見朴によって創立された家塾「復陽洞」では実験的な薬学教育が行われており、1733(享保18)年「復陽洞」にて「鬪草会」が開かれた。「鬪草会」は古くは「くさあわせ」とい草花を競ったもので、参加者各自が採集持参した薬草について、鑑定、性状、効能、応用などを考究し、真剣に質疑討論する会合であった。これはまさに薬草講習会であり、当時における薬学大会ともいえるものである。江戸湯島で田村藍水が「物産会」を初めて開いたのは1757(宝暦7)年であることから、既にその24年前に開かれた「鬪草会」は、我が国最古の薬学大会の記録といえるかもしれない。なお、この「鬪草会」は後年再春館に引き継がれている。

第3節 再春館

熊本藩の組織的医学教育は、第8代藩主細川重賢公によって始められた。重賢は1754

(宝暦4)年、まず藩校「時習館」を創立した。藩校時習館は細川内膳家当主長岡忠英を初代総教(総長)に、秋山玉山を教授(学長)に迎えて開校し、以後115年続く全国に名を知られた藩校の1つとなり、熊本藩士族の文武両道、質実剛健の気風を育てたとされる。幕末期には横井小楠が時習館に学び、塾頭も勤めた。1756(宝暦6)年には藩の医学校が創設され、「再春館」と命名された。再春館の呼称は、家塾「復陽洞」を創立し、再春館の筆頭教授を務めた村井見朴の夢に現れたものといい、回春(若返ること、病気が治ること)を意味するものとしてこれが採用された。「再春館」は熊本大学医学部の前身校であり、北里柴三郎らを輩出した。「再春館」設立の地は角井で現在の熊本市二本木町付近であり、寮、講堂、植物園を備えていた。また、館内に薬圃及び製薬室を設けて、医薬の研究と製造にも従事した。「再春館」には、本道(内科)・外科・眼科・児科・婦科・口科・鍼科・按摩科が存在したが、この8科のほかに、引経科で解剖学、物産科で薬学の講義を行っていた。物産科の教科書には本草綱目と薬性歌が挙げられている。また再春館には「司薬」という役があって、薬圃における薬草の栽植、薬物の製造・調剤、施薬などを司り、開設当時は道家仙庵、秋山宗節、龍造寺宗碩が担当した。この薬圃で栽培されていた薬草類としては、1852(嘉永5)年の目録によると草の部136品、木の部112品が記録されている。前述の「鬪草会」は1759(宝暦9)年以後、毎年1回5月に開催され、後には数百名の参加者があり、物産学研究の一大権威となった。その後、再春館は1771(明和8)年12月に熊本区山崎町(現在は熊本市紺屋今町)の東側の藪を拓いて移転した。現在この地には、再春館跡の案内板がある。なお、「再春館」については『熊本大学医学部百年史』通史編に詳しく記述されているので、参照されたい。

第4節 蕃滋園

1756(宝暦6)年7月、第8代藩主細川重賢公によって薬園創立の命が下り、現在の熊本市薬園町に528坪の薬草園が作られ「蕃滋園」と名づけられた。1762(宝暦12)年建部大火後、蕃滋園は拡張され、盛時には1,594.5坪に達した。熊本藩の薬草園は、この蕃滋園を中心として、茶碗山、矢部町、熊本市保田窪、一の宮町坂梨などにあった。1871(明治4)年の廃藩置県により、薬園は藤井家個人の所有となった。蕃滋園に栽植されていた植物は総計829種にも及ぶが、1890(明治23)年9月に総計154種の薬草薬木が当時の第五高等中学校に寄附された。

第5節 再春館の閉鎖と古城治療所

1870(明治3)年7月8日、明治の新政に伴い再春館役職員は免職となり、創立115年にして再春館はその機能を終えた。再春館閉鎖の翌8月、藩庁は古城に病院を興すことを決定し、10月6日に治療所が開かれて再春館の図書備品類はここに引き継がれた。1877(明治10)年2月、病院は西南戦争の兵火にあって焼失し、その後、1891(明治24)年4月には古城治療所もついに閉鎖した。

第6節 私立熊本薬学校

1874(明治7)年、文部省は医制とともに薬舗の規則を制定して、算術・理化学大意・薬剂学大意・処方学大意の試験を経た者でなければ薬舗開業免状を下付しないことを定めた。そのため、この試験に対処するための独立した薬学教育機関が要望されるようになった。当時熊本に陸軍薬剂官として在住していた町田伸(1881(明治14)年東京大学薬学部卒)、平山増之助(1882(明治15)年東京大学薬学部卒)、県立熊本医学校教諭兼薬務局長蔵田孝貞、熊本医学校教諭志村釵七郎らは、県下に薬学教育機関がないことを憂い、熊本区内の薬業家諸氏に薬学校設置の必要性を説いたところ賛意が得られ、蔵田孝貞、志村釵七郎、大塚隆、野々口為志、大野尊明の名義で、1882(明治15)年2月6日熊本県令富岡敬明あて私立熊本薬学校設立願が提出された。私立熊本薬学校は、1885(明治18)年3月3日付設立が認可され、4月1日に仮開校式を挙行了。所在地は熊本区紺屋今町49番地で、熊本における独立した薬学教育機関がここに初めて誕生した。

私立熊本薬学校の修業年限は2年で、出願資格は16歳以上で小学校中等科卒業以上の学力を有する者とされた。生徒募集に際しては極力勧誘に努めたが、入学志願者はわずか5名であった。

1 私立熊本薬学校の教則及び教科書

私立熊本薬学校時代の教則及び教科書は表1のとおりである。

表1 私立熊本薬学校の教則及び教科書

| |
|--|
| 教 則 |
| 本校は薬剂師の速成を図り、乙種薬学校通則に基き、二カ年を期し簡易の薬学科を教授するものとする。 |
| 学科課程 |
| 学科を分け独乙学・物理学・化学・植物学・薬品学・製薬学・薬物試験法・調剤学・製薬学実地とす。 第一年前期：独乙学、物理学、無機化学 第一年後期：独乙学、物理学、有機化学 第二年前期：植物学、薬品学、製薬学実地 第二年後期：植物学、薬物試験法、調剤学 |
| 教科書一覧 |
| 独乙学の部：文法書 ゲルゲ氏著書 会話書 東京大学予備門出版 理学科の部：物理学 飯盛挺造(微量天びんの先駆者) 訳 化学科の部：化学 丹波敬三 訳 植物学科の部：普通植物学 丹波敬三 訳 薬品学科の部：薬品学 大井玄洞(生薬学という用語を創出した) 訳 製薬学科の部：製薬全書 下山順一郎(薬学博士第1号) 訳 薬物試験法の部：薬品試験書 ハーゲル氏著 調剤学科の部：調剤要術 柴田承桂(初版『日本薬局方』編集委員) 訳 |

1886(明治19)年5月、生徒の増加に伴い教室は狭隘となり、熊本区の手取本町に建坪31坪の2階建民家を借り受けて移転した。しかし、薬学校の設立者・教員らは、経済状況

の改善を期し更に薬業家有志の賛同を求めて500余円を投じ、区内藪の内町に「私立熊本製薬所」を設立した。ここでは種々の製剤を行い、また薬品試験の依頼に応じて得た利益の一切を校費補助に充てようとしたが、その目的は未達に終わった。

1887(明治20)年4月の生徒募集に際しては30数名の入学をみた。この機を逸せず隆盛策を企画して、5月に全県下薬業家の大会を開き、各自毎年応分の寄附を行って本校を維持することを決議した。更に市内の医科薬業家有志及び大阪市知名の薬業家並びに本校関係者の特別寄附金で校舎の新築を行うことを決議した。その甲斐あって7月には、区内山崎町19番地に305坪の土地を購入し、更に2階建21.5坪の校舎1棟及び8坪の付属室1棟を建築し、9月に新校舎に移転した。11月26日には新校舎の開校式を兼ねて第1回卒業証書授与式を挙行了。また、新校舎への移転と同時に私立熊本製薬所の財産全部が本校に寄附された。1888(明治21)年1月、製薬士平山増之助に初代校長を嘱託し、ここに初代校長の決定をみた。1889(明治22)年7月、製薬士中西司馬が第2代校長に就任した。1893(明治26)年、薬学校の優秀卒業生は無試験で、その他の者は試験の上第五高等学校校医学部薬学科第3学年に編入が認められることになり、それにより入学者が増加した。ただし、この無試験編入制度は長くは続かず、1899(明治32)年6月に廃止された。1895(明治28)年4月には、中西校長が辞任し、専任教師の森本栄太郎が第3代校長を兼務することとなった。1903(明治36)年5月、森本氏の校長兼務を解き、安香堯行に第4代校長を嘱託した。1905(明治38)年7月、校友の親交を温め、風紀を維持し、知識を交換するという3つの目的のもと、卒業生及び在学生により校友会が設立され、同年12月に校友会雑誌第1号が発刊された。1906(明治39)年4月には、修業年限が2年から2年半に延長された。

2 私立熊本薬学校校長の氏名、在任期間、略歴

①初代平山増之助校長

校長在任期間1888(明治21)年1月～1889(明治22)年7月。1860(万延元)年8月千葉県香取郡に誕生。1876(明治9)年東京大学予備門入学、1882(明治15)年東京大学医学部薬学科卒業。その後、熊本陸軍病院二等薬剤師として在勤、1888(明治21)年私立熊本薬学校校長、1889(明治22)年熊本県薬剤師会初代会長就任。同年ドイツ留学を機に私立熊本薬学校校長を辞任、1891(明治24)年帰国し、東京衛生病院、陸軍軍医学校教官を経て、1907(明治40)年薬学博士を取得。1910(明治43)年第2代富山県立薬学専門学校校長(1910年9月～1914年1月)。日本薬局方調査会委員、薬剤師試験委員、日本薬学会編纂委員長を歴任。1914(大正3)年6月29日逝去(享年54歳)、陸軍一等薬剤正従四位勲三等功四級薬学博士。

②第2代中西司馬校長

校長在任期間1889(明治22)年7月～1895(明治28)年4月。名古屋出身。1882(明治15)年東京大学医学部薬学科卒業。同年陸軍に入隊、1904(明治37)年陸軍二等薬剤正に任じ、1907(明治40)年予備被仰付。1889(明治22)年7月第2代私立熊本薬学校校長に就任。同年熊本県薬剤師会初代会長就任。1907(明治40)年10月19日富山県立薬業学校校長兼教諭に任命され、続いて1910(明治43)年4月1日富山県立薬学専門学校の初代校長に就任。同年6月28日富山県立薬学専門学校校長(現職)で逝去。1905(明治38)年戦

役の功により勲四等旭日小授章。

③第3代森本栄太郎校長

校長在任期間1895（明治28）年4月～1903（明治36）年5月。熊本出身。1888（明治21）年11月私立熊本薬学校に専任教師として着任。校長退任後も教頭兼生徒監役等で安香堯行校長を支え続けた。熊本薬学校に着任以来40余年終始一貫して本校のために終生を捧げ、昇格及び移管に碎身の努力を続けた。1929（昭和4）年3月老齢のため依願退職。同4月退任式。

④第4代安香堯行校長の内容は、第9節九州薬学専門学校の項で詳述する。

3 私立熊本薬学校の卒業生数

私立熊本薬学校の卒業生については表2のとおりである。

表2 私立熊本薬学校の卒業生数

| 年 月 | 卒業生数 | 年 月 | 卒業生数 |
|----------|--|---------|-----------------|
| 1887年11月 | 第1回生 5名 (村上栄生、朽原豊喜、松田敬太郎、村上良吉、富田謙三) | 1898年8月 | 第21回生 4名 |
| 1888年7月 | 第2回生 4名 | 1899年4月 | 第22回生 6名 |
| 1889年4月 | 第3回生 6名 | 1899年9月 | 第23回生 8名 |
| 1889年10月 | 第4回生 8名 | 1900年3月 | 第24回生 6名 |
| 1890年5月 | 第5回生 8名 | 1900年9月 | 第25回生 6名 |
| 1891年4月 | 第6回生 3名 | 1901年3月 | 第26回生 13名 |
| 1891年10月 | 第7回生 1名 | 1901年9月 | 第27回生 8名 |
| 1892年4月 | 第8回生 6名 | 1902年3月 | 第28回生 3名 |
| 1892年10月 | 第9回生 4名 | 1902年9月 | 第29回生 6名 |
| 1893年3月 | 第10回生 6名 | 1903年3月 | 第30回生 8名 |
| 1893年9月 | 第11回生 10名 | 1903年9月 | 第31回生 8名 |
| 1894年3月 | 第12回生 6名 | 1904年3月 | 第32回生 21名 |
| 1894年8月 | 第13回生 16名(日清戦争) | 1904年9月 | 第33回生 15名(日露戦争) |
| 1895年3月 | 第14回生 5名 | 1905年3月 | 第34回生 13名 |
| 1895年9月 | 第15回生 4名 | 1905年9月 | 第35回生 10名 |
| 1896年3月 | 第16回生 11名 | 1906年3月 | 第36回生 26名 |
| 1896年7月 | 第17回生 2名 | 1906年9月 | 第37回生 14名 |
| 1897年3月 | 第18回生 9名 | 1907年3月 | 第38回生 36名 |
| 1897年7月 | 第19回生 10名 | 1907年9月 | 第39回生 25名 |
| 1898年3月 | 第20回生 7名 | 1908年9月 | 第40回生 31名 |
| | | 1909年3月 | 第41回生 21名 |

第7節 私立九州薬学校

1887（明治20）年以來山崎町にあった私立熊本薬学校は、敷地約300坪、建坪80坪と極め

て狭隘であった。そこで、1905（明治38）年12月、飽託郡本庄村に建築用地として2,600余坪（約86a）を購入した。更に、1907（明治40）年2月に校舎新築移転委員及び設立者が会合し、専門学校昇格を目指して、金2万円を限り15年償還1株額面25円の校債を発行し、全国の有志に校債の応募又は寄附金の寄贈を求めた。「私立熊本薬学校公債募集趣意書」の結びの部分に次に示す。

本校の基礎は実に此に因りて確乎として樹立し、社会の衛生事業殖産興業は是より聊か面目を改めしむることを得しか。冀くは這搬事業の成否は直に本校の運命を左右すべきものなることを諒察せられ、別項校債募集並償還規定に依り校債応募若くは寄付金寄贈の榮を賜らんことを。ここに謹んで本校校債募集趣意書を呈し敢えて諸賢の劉覽に供す。私立熊本薬学校

安香堯行校長の東西奔走の努力もあって、1907（明治40）年12月には既に校債申込額が1万7,000円に達していた。しかし、本庄村の新築予定地を更に拡張すべく隣接地の買収を試みたが、事情により交渉はまとまらず、校舎新築地は飽託郡大江村が候補地となった。1908（明治41）年3月、現所在地の飽託郡大江村字九品寺78番地に5,438円を投じて3,935坪の敷地を買収した。この頃には校債申込額も予定額の3万円に達したため新本校舎（18棟総建坪700坪）の建築に直ちに着工し、1909（明治42）年12月に竣工した。これは熊本大学薬学部の最初の建物である。その他の建物として、実験室及び分析室1棟、製煉棟及び分析室1棟、生徒控所1棟、当直室及び納屋1棟、各渡り廊下その他5棟。なお、この頃に植樹された樟の若苗が成長し、現在の熊葉のシンボルとなっている。一方、巨額の校債の償還が迫られる中、塩見伊八郎氏、平山増之助初代熊本薬学校校長、武田長兵衛氏の英断により大阪薬業家の所有する校債が全学寄附されることになり、これを契機に校債寄附運動が大いに高まった。更に県会議員平野澄久氏らの努力により、熊本県からの補助金のお陰で校債の償還も進んだ。1908（明治41）年4月1日には私立九州薬学校と改称された。敷地・建物関係では、その後、1911年（明治44）年5月に県立高等女学校旧建物の払い下げを受け、校舎が増設された。1912（明治45）年には飽託郡大江村九品寺188番地を買い入れ、ここに2階建1棟103坪、平家建1棟40坪、その他附属舎10棟148坪の計12棟291坪の寄宿舎を建築し、生徒100名収容の設備とした。1910（明治43）年9月、本科第1回生57名が入学した。なお、1915（大正4）年1月、本校は社団法人化され、熊本県学務課長に会長を委嘱した。

第8節 九州薬学専門学校

1910（明治43）年1月21日付をもって「専門学校令」により薬学専門学校の設立が認可され、同年4月1日に私立では最初となる「私立九州薬学専門学校」が誕生した。本科（3年制、中学卒対象）・別科（従来の乙種薬学校）が設置され、開校当時の職員構成は、校長1、教授2、講師7、助教授1、書記4、助手2、雇い4であった。同じく生徒数は、別科第5期40名、第4期45名、第3期37名、第2期60名、第1期22名であり、翌年5月1日の本科1年は57名であった。

表3 1910(明治43)年当時の科目・担当教員及び事務職員

| 科目 | 担当教員 | 科目 | 担当教員 |
|-------------------------|-------|---------------|---------------------|
| 化学 | 安香堯行 | 薬用植物学・分析学・調剤学 | 和田正男 |
| 物理学・定量分析学・鑑定 | 森本栄太郎 | 衛生化学 | 緒方 晋 |
| 薬局方 | 酒井甲太郎 | 数学 | 岡村周平 |
| 生薬学・衛生学 | 松南千寿 | 独逸語 | 成田秀三、上田茂次郎 |
| 薬化学・薬品工業学・機械学・定性分析学・鉱物学 | 水谷友三 | 体操 | 川上新蔵 |
| 薬物学 | 酒井 保 | 学校医 | 原口 競 |
| 理論化学 | 白壁傑次郎 | 柔道 | 町野貞吉、宮田高知、木村 篤、白井 亮 |
| 修身 | 福田令寿 | 事務長 | 園部交雅 |
| 細菌学 | 中嶋修一 | 教務 | 笠 鶴章 |
| 化学・裁判化学 | 竹下澄人 | 会計 | 宮崎平吉 |
| | | 庶務 | 後藤子之八 |

また、文部省視学官の視察の後、本校本科卒業生は無試験で薬剤師免許証を下付されることとなった。

1913(大正2)年4月2日、別科第49回生23名が卒業した。4月8日、文部大臣より本科卒業生が「私立九州薬学専門学校薬学士」を称する件が認可され、10月29日に本科第1回卒業式が挙行された。1915(大正4)年1月、学校組織は財団法人化され、初代会長に佐上信一(熊本県学務課長)が就任した。

1918(大正7)年10月2日、本校講堂に若狭万次郎教諭を招いて発表会兼練習が行われ校歌「天龍猛る阿蘇の峰」(江口正男ほか作詞、若狭万次郎作曲)が誕生した。

表4 1918(大正7)年当時の教員組織

| 科目 | 担当教員 | 科目 | 担当教員 |
|---------------|----------------|------|----------------|
| 物理学 | 安香堯行校長、森本栄太郎教授 | 理論化学 | 白壁傑次郎講師 |
| 生薬学・薬品鑑定・化学講座 | 篠崎憲一郎教授 | 薬局方 | 酒井甲太郎講師 |
| 薬工学・鉱物学 | 高橋省造教授 | 機械学 | 小出広太郎講師 |
| 薬用植物学・分析学・調剤学 | 和田正男教授 | 薬物学 | 酒井 保講師 |
| 体操 | 小高 玄教授、川上新蔵助教授 | 独逸語 | 酒井隆吉講師、上田茂次郎講師 |
| | | 修身 | 福田令寿講師 |

1919(大正8)年9月9日文部省令第24号に基づき校名中「私立」の2字が削除され、「九州薬学専門学校」と改称された。10月23日本校講堂で同窓会「蘇杏会」の発会式が挙行された。

表5 私立九州薬学校の卒業生数

| 年月 | 卒業区分 | 人数 | 備考 |
|----------|----------|-----|-------------|
| 1913年4月 | 別科 第49回生 | 23名 | |
| 1913年7月 | 別科 第50回生 | 15名 | |
| 1913年10月 | 別科 第51回生 | 18名 | |
| 1913年10月 | 本科 第1回生 | 48名 | 卒業生総代 柴田文一郎 |
| 1914年4月 | 別科 第52回生 | 22名 | |

| 年 月 | 卒業区分 | 人数 | 備 考 |
|----------|----------|-----|--------------------|
| 1914年10月 | 本科 第2回生 | 35名 | |
| 1915年10月 | 別科 第53回生 | 16名 | |
| 1915年3月 | 別科 第54回生 | 10名 | |
| 1915年6月 | 本科 第3回生 | 44名 | |
| 1915年9月 | 別科 第55回生 | 8名 | |
| 1916年3月 | 別科 第56回生 | 23名 | |
| 1916年6月 | 本科 第4回生 | 51名 | |
| 1916年3月 | 別科 第57回生 | 9名 | |
| 1917年4月 | 本科 第5回生 | 76名 | |
| 1917年9月 | 別科 第58回生 | 13名 | 別科最後の卒業生、卒業生総計755名 |
| 1918年4月 | 本科 第6回生 | 62名 | |
| 1919年3月 | 本科 第7回生 | 95名 | |
| 1920年4月 | 本科 第8回生 | 66名 | |
| 1921年4月 | 本科 第9回生 | 75名 | |
| 1922年3月 | 本科 第10回生 | 96名 | |
| 1923年3月 | 本科 第11回生 | 77名 | |
| 1924年3月 | 本科 第12回生 | 87名 | |

第9節 九州薬学専門学校の官立移管

1920(大正9)年の九州薬学専門学校官立期成会において、期成会会則及び趣意書が作成された。趣意書の最後には、次の決議が書かれている。

九州薬学専門学校をして時世の進歩に伴い適宜の発展を遂げしむる為、是を官立に移すことを期す。右決議す。大正9年12月九州薬学専門学校官立期成会

同年12月熊本県議会では九州薬学専門学校の官立移管に関する決議案が満場一致で通過した。川上彦春熊本県知事は議案書を持って上京し、文部省に陳情書、貴族院・衆議院両院議長に請願書を提出し、移管運動を活発化した。

1921(大正10)年3月の衆議院にて、九州薬学専門学校を文部省所管に移す建議案が可決され、1922(大正11)年4月、正式に官立移管願が提出された。当然のことではあるが、



写真2 熊本県薬業組合の記功碑(現在)

移管に伴い九州薬学専門学校不動産・資産のすべては国に寄附された。1925(大正14)年、1月31日勅令第6号をもって九州薬学専門学校は文部省直轄学校となった。3月3日に校則が制定(薬専6号)され、3月31日には九州薬学専門学校が廃止された(熊専10号)。こうして1925年4月1日、官立熊本薬学専門学校が開校した。初代校長は熊本薬学校校長・九州薬学専門学校校長であった安香堯行教授が引き継ぎ、定員教授4名を12名に、助教授2名を4名に、書記2名を5名に改正した。一方、九州薬学専門学校閉鎖に伴い、同学校の資金繰りを長年支えてきた九州薬学専門学校財団法人は、1931(昭和6)年7月29日に一切の整理を終え解散した。また、熊本薬学校時代から辛苦の中で経営維持に尽力した熊本県薬業組

合の記功碑が建設された。

1926(大正15)年、5,567坪の敷地を購入し、1927(昭和2)年に薬草園を開設した。この薬草園には、前述のとおり、蕃滋園由来の植物が引き継がれている。

(1) 初代安香堯行校長

私立熊本薬学校第4代、私立九州薬学専門学校初代、熊本薬学専門学校初代校長。校長在任期間1903(明治36)年5月～1908(明治41)年3月。1855(安政2)年静岡に生まれる。1882(明治15)年東京大学製薬学科を卒業、陸軍薬剤官、愛知薬学校、愛知病院調剤所長を経て、大阪共立薬学校長を嘱託(1898(明治31)年3月～1899(明治32)年5月)。1900(明治33)年6月熊本県立病院調剤部長に任命され熊本に赴任。1901(明治34)年5月私立熊本薬学校講師を嘱託。1903(明治36)年5月15日同校第4代校長を嘱託された。1960(昭和35)年熊本県近代文化功労者受賞。1928(昭和3)年1月5日逝去。



写真3 安香堯行校長



写真4 安香堯行校長胸像(現在)

(2) 安香堯行校長の葬儀

1928(昭和3)年1月5日午前0時10分、安香校長は狭心症の発作を起こし暁を待たず他界した。享年74歳であった。葬送の儀は、同月10日午後1時より校葬として本校講堂で執り行われた。講堂正面に大礼服を被せられた霊柩を安置し、安国寺住職以下導師5名、伴僧4名が列席して儀式は3時間にわたり厳かに進行した。弔辞を読む者各界代表33名に及び、弔電は水野錬太郎文部大臣、全国の帝国大学長、高等学校及び各専門学校校長からのものなど600余通に上った。式後、戸田助人(本科第7回生)筆になる銘旗を生徒4名にて揚げ、葬列は校門を出て上河原火葬場に向かい茶毘に附された。会葬者1,000人、葬列は250mにも及んだ。現在は先生が当時植えられた樟の若苗がまさに大樹に成長し、学舎を囲み威厳を与えている。同年10月27日、故安香校長胸像除幕式及び新築校舎の落成式が行われた。新校舎の落成式は、官立移管祝賀を兼ねて挙行された。新築落成式は、当初1927(昭和2)年秋に行われる予定であったが、失火のために校舎の一部を焼失し、その復旧に約1年の歳月を要したためにこの日の祝典となった。

(3) 安香堯行校長のエピソード

以下に安香校長のエピソードをいくつか紹介し、これをもって、薬学専門学校に込めら

れた氏の想いや教育理念を共有したい。

私立熊本薬学校の私立九州薬学校への、そして私立九州専門学校への昇格のために、安香校長は一念発起され、その信念と意気はすさまじいものであった。朝8時には出校して自著の教科書で化学の講義を済ませると、直ちに県立病院に出勤し調剤部長の役目を果たし、午後4時には再び学校に戻って、良き内助者である森本栄太郎教頭（第3代校長）とともに新築計画を検討された。一緒に自転車に乗って頑迷な地主たちとの敷地の交渉や、土地検分などに東奔西走されるのがその頃の日課であった。安香校長は熊本における自転車の初乗りという噂であった。また、寄附勧誘のためにそれこそ百里の道も遠しとせず、ほとんど寝食を忘れ、私財は恩給に至るまで投げ尽くされ、一家の破滅をも賭するといっても過言ではなかった。

安香校長は、当時の薬学教育界に先駆けて、薬理学、薬品機械学及び理論化学を教科に採用し、その卓越した識見と学殖は斯界に高く評価された。また、他大学に先んじて製薬学科を設置し、学内に製薬工場を有したことも、安香校長の先見の明を示すものである。

安香校長は、6人の子女を残して夫人に先立たれるという家庭的不幸の中で持病のリウマチに悩んでいたが、愛児たちのために再婚もしなかった。こうした不如意な環境にあったにもかかわらず、先生の切なる愛校心はついにその目的を達し、「私立九州薬学専門学校」が誕生することとなった。

1916（大正5）年当時、私立九州薬学専門学校の経営は極めて困難で、予期せぬ高等女学校の旧校舍払い下げによる校舎及び寄宿舎増築のための校債の償還に文字通り火の車であった。大阪の同窓会である銀杏会に出かけた安香校長の熱誠により校債寄附運動が高まり、熊本県からの補助金等もあって危急存亡の危機をなんとか脱した。

私立九州薬学専門学校の官立移管という難事業に立ち上がった安香校長は、1920（大正9）年に熊本病院調剤部長も熊本医学専門学校教授も辞退し、好きなたばこも断って、背水の陣を敷いた。齢すでに60の坂も半ばを越えた老軀もいとわず、全国を行脚して病院、試験所を視察し、実習実験設備を参考にして学校の充実を図った。また、絶えず文部省要路に折衝し、持ち前の円転滑脱な社交性と至情とを披露して緊密な連絡を図るのを忘れなかった。

安香校長は文部省に向かうときも、乗り物代を節約するため愛用の自転車を東京まで運び日参した。度重なる出資で勲章や懐中時計まで質草に入れようとし、また、夫人は木綿着で通した。このような窮迫ぶりを見かねた親友の熊本医科大学学長山崎正董が、官立移管は困難であると中止を勧告したことがあった。このとき校長は決然として、「たとえ私一代で官立移管が成就されなくとも私は私の一生を捧げておけば満足である。私の終生の事業として最後まで努力すれば、不幸に途中で死んでもこの事業は必ずや後継者が現れよう。しかるに途中で挫折したならば、恐らくこれを守り立て後に続く者はいないであろう」と答えた。あれほど剛腹で知られる山崎学長も二度と勧告しなかった。

1928（昭和3）年元旦、安香校長は初めて大礼服を着用して学校の拝賀式に参列した。式後校長室にて、「大礼服は立派だろう。しかし君、安香個人のことじゃない。本校校長がこんな服装をして立派になったということは我が学校が高等専門学府の御仲間入りしたという証拠で、ただそのことが僕はうれしいのさ」。これを聞いて苦楽をともにした藤田穆博士は感涙にむせんだ。その夜、藤田博士が安香校長宅を訪れた折、いつになく酒を過ぎられた安香校長は「藤田君、我々はやれ大礼服だ、やれ不足だ、やれ何だ彼んだと言って

いるが、今御上や世間では、熊本薬専が遮二無二学校は作ってもらったが、さて奴たちがどんな風によっていくか知らんと思って見ているのだよ。他の学校に負けぬようになるにはまだなかなかだよ」と言って杯を措いた。思えばこれが校長の最後の教訓であった。

第10節 熊本薬学専門学校の充実



写真5 行幸記念碑（現在）

安香堯行校長の後を継ぐ形で、1928（昭和3）年2月27日、村山義温が2代目校長に就任した。いよいよ学校の施設・教育・研究が充実して内外に高く評価される時代を迎えた。1931（昭和6）年、天皇陛下が本校に行幸され生徒の実験をご覧になられた。この日を記念して行幸記念碑が建立された。また同年、御親閲に参列する準備として校旗の推戴式を行った。

1938（昭和13）年当時の学科課程と担当教官を表6に示す。

表6 1938（昭和13）年当時の学科課程と担当教官

| 科目 | 担当教官 | 科目 | 担当教官 |
|-------------------------|-----------|----------------|-----------|
| 修身・動植物科学・英語 | 村山義温 | 修身・法制経済 | 赤星敏文 |
| 独逸語 | 上石保教、木尾智純 | 理論化学 | 白壁傑次郎 |
| 有機分析・同実習・薬効学・裁判化学・英語 | 藤田 穆 | 調剤学 | 田中義雄 |
| 独逸語・修身 | 上田茂次郎 | 微生物学・同実習 | 太田原豊一 |
| 薬化学・同実習 | 鶴飼貞二 | 薬理学 | 尾崎正道 |
| 薬品製造学・同実習・製図学実習 | 佐藤定治 | 薬事法令・飲食物制度 | 上原今朝蔵 |
| 鉱物学及無機化学・定性分析学同実習 | 和田正男 | 機械学及製図 | 川合正昌 |
| 有機化学・動植物化学・同実習 | 柴田文一郎 | 薬品製造学教室兼製薬工場課附 | 江口宣明 |
| 生薬学及び和漢薬学・同実習・薬用植物学・同実習 | 宗定哲二 | 応用電気学実習 | 中村津直 |
| 衛生化学・飲食物科学・同実習・裁判化学・同実習 | 酒井亮次 | 生薬学実習・薬用植物学実習 | 渡辺忠次郎 |
| 物理学・応用電気・化学・同実習 | 栗田藤四朗 | 薬化学実習 | |
| 学校教練 | 堀江長蔵 | 調剤学製剤学実習 | 安部初穂、白上友之 |
| 製剤学・同実習・調剤学実習 | 津田弘喜 | 有機分析学実習 | 田中重男 |
| 定量分析学・同実習・薬局方及薬品鑑定学・同実習 | 真崎辰次 | 定性分析実習 | 堤 博紀 |
| | | 有機分析実習 | 福田直憲 |
| | | 動植物化学実習 | 榎本 実 |
| | | | 国崎辰喜 |

1942(昭和17)年3月31日、第2代校長村山義温は退職した。この間の出来事は部局史編第1編第5章第2節を参照されたい。同日付をもって藤田穆教授が第3代校長に任命された。1944(昭和19)年1月、藤田校長は石坂繁代議士経由で「化学専門学校」への改称意見書(分析化学・合成化学・厚生化学・製薬化学の4科編成、後の2科が薬剤師育成を担当)を提出した。1945(昭和20)年4月、全国に先駆けて熊本薬学専門学校に製薬学科の増設が実現し、我が国初の2学科制の薬学専門学校となった。新設のものを製造薬学科、従来の本科を厚生薬学科と称することになった。このときの学科課程を表7に示す。

表7 1946(昭和21)年当時の熊本薬学専門学校の学科課程

| 厚生薬学科 | | 製造薬学科 | | 厚生薬学科 | | 製造薬学科 | |
|--------|-------|--------|-------|---------|-------|---------------|-------|
| 学科目 | 授業総時数 | 学科目 | 授業総時数 | 学科目 | 授業総時数 | 学科目 | 授業総時数 |
| 公民 | 140 | 公民 | 140 | 無機化学実習 | 175 | 無機化学実習 | 175 |
| 外国語 | 455 | 外国語 | 455 | 有機化学実習 | 280 | 有機化学実習 | 35 |
| 数学 | 140 | 数学 | 140 | 薬用植物学実習 | 70 | 薬用植物学実習 | 70 |
| 物理 | 140 | 物理 | 140 | 生薬学実習 | 70 | 生薬学実習 | 70 |
| 体育 | 210 | 体育 | 210 | 厚生化学実習 | 210 | 厚生化学実習 | 105 |
| 薬用植物学 | 105 | 薬用植物学 | 105 | 調剤学実習 | 70 | 調剤学実習 | 70 |
| 無機化学 | 105 | 無機化学 | 105 | 薬局方実習 | 70 | 局方薬品試験法 | 70 |
| 有機化学 | 245 | 有機化学 | 245 | 微生物学実習 | 70 | 醱酵化学 | 70 |
| 分析化学 | 105 | 分析化学 | 105 | 薬効学実習 | 70 | 製造設計及 工場経営 | 35 |
| 理論化学 | 105 | 理論化学 | 105 | | | 化学機械及製図 | 70 |
| 生薬学 | 70 | 生薬学 | 70 | | | 電気化学 | 70 |
| 微生物学 | 35 | 微生物学 | 35 | | | 電気化学実習 | |
| 厚生化学 | 280 | 厚生化学 | 140 | | | 醱酵化学実習 | 175 |
| 薬効学 | 210 | 薬効学 | 70 | | | 製薬化学実習 | |
| 調剤学 | 70 | 調剤学 | 70 | | | | |
| 薬局方 | 70 | 薬局方 | 70 | | | | |
| 製薬化学 | 70 | 製薬化学 | 140 | | | | |
| 分析化学実習 | 350 | 分析化学実習 | 350 | | | | |
| | | | | 計 | 3,979 | 計 | 3,990 |

終戦後の1946(昭和21)年4月から男女共学制が実施された。この年に入学した女子生徒は2名であった。同年5月25日、熊本薬学専門学校復興期成会が組織され、戦災復興に力を注ぐことになった。1949(昭和24)年3月10日、薬品分析学教室1棟172.5坪が竣工した。同年5月31日、「国立学校設置法」が施行され、新生熊本大学が発足した。これに伴い熊本薬学専門学校は熊本大学熊本薬学専門学校となり、同時に、薬学部として熊本大学に包含された。初代薬学部長は藤田専門学校長に引き継がれた。当時の薬学部は2学科9講座(1兼任)から構成され、新入生は薬学部生となった。薬学専門学校生徒が在学する期間は熊本大学熊本薬学専門学校と呼ばれることになり、在学生のすべてが卒業する1951(昭和26)年3月31日をもって自然廃校されることになった。1951年3月10日に熊本薬学専門学校第39回卒業式が薬学部講堂で挙行され、専門学校最後の卒業生139名(厚生薬学科101名、製造薬学科38名)が送り出された。同日謝恩会が催された。翌3月11日には、講堂において熊本薬学専門学校課程の終了式が挙行された。こうして、同年3月31日の法律第84号により熊本薬学専門学校は廃止された。熊本薬学専門学校卒業生数を表8に示す(総数3,232名)。

表8 熊本薬学専門学校卒業生数

| 年 | 卒業生数 | 備考 |
|-------|------|---------------------------|
| 1925年 | 102名 | |
| 1926年 | 94名 | |
| 1927年 | 101名 | |
| 1928年 | 75名 | |
| 1929年 | 73名 | |
| 1930年 | 78名 | |
| 1931年 | 93名 | |
| 1932年 | 87名 | |
| 1933年 | 75名 | |
| 1934年 | 85名 | |
| 1935年 | 78名 | |
| 1936年 | 75名 | |
| 1937年 | 85名 | |
| 1938年 | 69名 | |
| 1939年 | 79名 | |
| 1940年 | 85名 | |
| 1941年 | 73名 | |
| 1942年 | 86名 | |
| 1943年 | 86名 | |
| 1944年 | 69名 | |
| 1945年 | 83名 | |
| 1946年 | 82名 | |
| 1948年 | 88名 | |
| 1949年 | 141名 | 厚生薬学科97名、製造薬学科44名 |
| 1950年 | 124名 | 厚生薬学科82名(内女子1名)、製造薬学科42名 |
| 1951年 | 115名 | 厚生薬学科75名(内女子3名)、製造薬学科40名 |
| 1952年 | 139名 | 厚生薬学科98名(内女子12名)、製造薬学科41名 |

最後に熊本薬学専門学校長の略歴を示す。

①第2代校長村山義温

校長在任期間1928(昭和3)年2月～1942(昭和17)年3月。1883(明治16)年12月31日生まれ。1909(明治42)年東京帝国大学医科大学薬学科を卒業。同大学助手、内務省衛生試験所技師、特許局技師を経て、1928(昭和3)年に第2代熊本薬学専門学校校長となり熊本に赴任した。その前年の1927(昭和2)年には「薬用植物成分の研究」で日本薬学会



写真6 村山義温先生記念像(現在)

奨励賞を受賞。1942(昭和17)年に熊本薬学専門学校を退職後、帝国臓器取締役工場長として活躍した。1943(昭和18)年に日本薬学会副会頭に就任。1946(昭和21)年に東京薬学専門学校長、1949(昭和24)年には東京薬科大学長として1966(昭和41)年の退官まで勤めた。その間1953(昭和28)年には日本生薬学会会長に就任。1966(昭和41)年『薬学六十年史』、1968(昭和43)年には『独居独語』を発刊。1980(昭和55)年5月22日逝去、享年96歳。また、逝去に際して遺族から寄附された多額の香典返しを基金にして、1981(昭和56)年に村山義温先生記念像が完成した。

②第3代校長藤田^{あつし} 校長

校長在任期間1942(昭和17)年3月～1951(昭和26)年3月。1924(大正13)年、私立九州薬学専門学校の教授に招かれ、1942(昭和17)年に官立移管後の第3代熊本薬学専門学校校長を拝命された。1945(昭和20)年7月1日の熊本大空襲にて灰燼と化した熊薬の復興、更に教育研究環境の整備充実に血の滲む努力を払い現在の揺るぎなき基盤を築いた。1949(昭和24)年熊本大学初代薬学部長に就任、1960(昭和35)年定年退官。その後、請われて第一薬科大学新設に参画、学長として教学及び経営に貢献。その間、日本薬学会副会頭等の要職にあって薬学の発展に尽力、その功により1970(昭和45)年勲二等に叙せられる。1971(昭和46)年4月76歳で逝去。若き日のドイツ留学中に発想し、帰国後に独創的な「有機概念図」を発表、研究者として化学界に万丈の気をはいた。



写真7 藤田穆先生胸像(現在)